

45歳の おっさん、 異世界召喚に 巻き込まれる



45sai no ossan, isekaishokan
ni makikomareru

著者
よしい

イラスト:市丸きすけ



オリアーナ

ロニーの娘。世界を飛び回る父に代わって商會を切り盛りする女傑だが、思い込みが激しい。

サージュ

ファートとコンビを組む謎多き冒険者。探求心が強い。

メーネア

召喚の儀式を行った王国の王女。王城では冷遇されており、その環境を変えるため白河に同行する。

杉浦香苗

白河とともに召喚された怖がりなOLで、抜群の料理の腕を持つ。小悪魔っぽい一面も？

ファート

サージュとコンビを組む謎多き冒険者。お姉さんぶるのが好き。

ロニー

異世界有数の大商會あるじの主。白河に何かと親身になってくれるも、そこにはちょっとした打算が……。

白河小次郎

本作の主人公で、心優しき45歳のおっさん。突如異世界に召喚されるが、発現した無数のスキルで楽しく生きる。



Characters

第一話 45歳のおっさん、異世界召喚に巻き込まれる

吾輩はおっさんである。

名前は白河小次郎（四十五歳）。

漱石さんには昔、たくさん世話になったな。その前は博文さんか。今の人は英世さんだよなあ。
いや、柴三郎さんだったか。

初めて聞いたときは誰よそいつって思ったが、皆知っていたのだろうか。
何の話かって？ まあ、分からなかったらいいよ。

さてと、今後のことにも影響があるかもしれないからちゃんと自己紹介をしておくよ。
見た目は中肉中背のいたって普通のおっさんといった感じ。

若いときは線が細くて顔も悪くはなかったとは思っただけだね。体も細かったしね。
ただね……おっさん、身長が低いのよ。百六十センチなのよ。

昔は百六十・六センチとかだね、若干百六十センチを超えてただけど、今じゃあ百五十九・六

センチとか……ギリギリ四捨五入で百六十センチといったところ。

だけど、このせいでねえ、昔でいうところの三高さんこう（懐かしい響きだ）とかには、引つかからないんだよ、おっさん。

まあ、中身で勝負ってやつさ。

趣味は読書（海外文学、ファンタジーの『指輪……』とか『ドラゴン……』シリーズとか）、音楽鑑賞（クラシック、特にベートーヴェンさん、シューベルトさんやチャイコフスキーさんとかもいいよね）。

それに家庭菜園、パソコン（自作を使っているよ。でも、やることは写真と動画の編集とネットぐらいだな）、写真撮影（結婚前は全国の花火大会の写真を撮りにいきまくっていた。あとは風景写真だ。間違っても女の子の写真は撮らなかつたぞ！ 人物は専門外だ！）。

地元の高校を出て就職してはや二十六年、ひたすら電車通勤している。

十年ほど前に結婚して二児の父親。

結婚してすぐに妻の実家をぶっ壊して新築したよ。

いわゆる二世帯住宅だね。

絶賛ローンレンジャー中さ。

ちなみに、上の子は小学生で、下の子はもうすぐ一歳。

家族との関係は良好。

まあ、下の子供がハイハイするようになってからは、夫婦水入らずの時間もなかなか取れなくてね。

具体的に何かって、そりゃあ……ゆっくり映画でも見たりとかさ、そういうの。

最近は夜中にこっそり……録りだめたドキュメンタリーを見たり、趣味の写真整理をしたりしているよ。

え？ おっさんの話なんて興味ない、だつて？

そりゃすまんね。そろそろ本題に入ろうか。

今日の朝なんだけどさ、いつものように家族に見送られて車に乗り込み、駅に向かったわけ。

あんなことになるとは想像すらしていなかったよ。



俺はいつも、最寄り駅が始発の電車の、同じ車両の同じ座席に座るようにしている。

そのために少々早く駅のホームに到着しておき、電車を一本スルーしてから乗っている。

待っている間はスマホをポチポチしていればいいから、時間を持って余すこともなく便利な世の中

になったな、とおっさんは思うわけなんだわ。

で、電車が到着して、着席してもしばらくはスマホをポチポチ。

発車する頃にはスマホをポケットに押し込み、カバンは膝の上に置いて腕を組み目を瞑る。

そうするとすぐに眠れる。一時間近くかかるからね、寝ておかないと。

たまに目の前に綺麗なお姉さんがいると、思わず見惚れて眠るのをやめてしまうけど、男なら仕方ないよな。

とまあ、こんな感じで三十分ほど経って、どこかの駅に到着したときにふっと起きてしまっただけで、人が降りたあとの座席の取り合いをしているのか、おっさんの足に誰かのカバンが当たって、それで起きたのさ。

で、ふっと周りを見渡すと、目の前にスラッとした立ち姿の美しい女性がいた。

年の頃は二十代半ばぐらいだろうか。

おっさんはまだ降りないので、その位置にいたらお姉さんはいつまで経っても座れないなあど気になってしまった。

おっさん、下を向くと首が痛くなるので顔を上げて座るんだけど、するとちょうどお姉さんの胸元が目に来るので、変に意識しないように努めた。

まだしばらくはかかるからすぐにまた目を瞑る。

しかしそのとき、ふいに目の前が明るくなったかと思ったら、突然尻餅をついてしまった。

「あ？　なんでだ。電車の座席に座ってたのに、なんで床に尻餅ついてんの」

身構えずに高さが五十センチ近くあるところからドスンと落ちたから、尻は痛いわ肺の空気は全部抜けたようになるわで、息苦しい。

怪我してないよな……と思いつつ目を開けてみる。

あれ、電車の中じゃないぞ。

で、何やら柔らかいものが顔に触れている。

どうやらさっきの美しいお姉さんが支えをなくして、おっさんの方に倒れ込んできていたようだ。

お姉さんの胸元が、偶然にもおっさんの顔のすぐ近くに……いや、当たっている。

これは不可抗力だが、非常にまずい。

おっさんだつて男だ、意識しないわけがない。

しかし、ここで下心を見せるのは論外。

腕を動かしながらこの状況を切り抜けようとするが、お姉さんがすごい力で抱きついてきている。う、腕が抜けない。

柔らかな感触が顔と腕に伝わってくる。

お姉さんがおっさんに「ごめんなさい」と何度も謝ってくるけど、こちらでも混乱していて「いえ、

大丈夫ですか」としか言えない。

で、しばらく状況が掴めないままお姉さんと見つめ合った後、周りを見渡す。石造りの建物の中みたいだ。とても日本とは思えない。

ここどこだ、なんだこれ。

お姉さんも状況が分かかっていないようだ。

ふと右隣を見ると、若い男性が床に座り込んで背中を擦っていた。

あ、こいつは隣に座っていた男性か。

他にも二十人近い人がいる。いや、もっと多いかもしれない。

お姉さんがまだこちらに寄りかかっているため、周囲がよく見えない。

それにしても、いつまでこんなにすごい力で抱きついてくるんだろう。

今も、顔と腕はお姉さんの柔らかな感触の中だ。

おっさんは妻子がいるんだから、この状況は何とかしないとまずいよな。

……しかも、よりもよってこんなタイミングでトイレに行きたくなってしまった。

変な意味じゃないんだからね。おしっこがしたいんだよ。

それからしばらくすると、周りの人たちが「どこだここ」とか、「何が起こった」とか騒ぎ始

めた。

おっさんは野郎には関心が無いから、とりあえず目の前のお姉さんにだけ声をかけることにした
(ちなみに、抱きついた状態からは既に解放済みだ)。

何せ男性陣はパニックになりかけてる。

こういうとき、慌てた方が負けなのだ。

そうだよ、紫電改。

「お姉さん、乗客の中に知り合いはいるのかな。いないならとりあえず俺から離れないで。何かおかしいよ」

お姉さんは、怯えたような瞳でこちらを見上げ、小さく頷いた。

何が起きたのか分からない状態で、いきなり年上の中年男性に「離れるな」と言われ、戸惑いつつも藪にもすがるような思いになったのかもしれない。

「は、はい、私は一人で通勤していますから、知り合いはいません。でも何なんでしょう、これ」

俺も一人なんだ。とにかく状況が分かるまで絶対に一人にならないようにね」

俺が念を押すと、お姉さんは再びこくりと頷き、おっさんの腕を掴んだ。

あー、周囲の女の子たちは結構泣いているね。おっさんだって泣きそうだけど。

と、ここで離れた場所から声が聞こえた。

「ようこそ！ インダルチャンス王国へ！」
なんだよ、インダルチャンスって。

インダルチャンス……道楽の国、か？

喋ってる奴、ニヤニヤしててなんだか気持ち悪いな。

つーか、マジどこだよ、ここ。

……早くトイレに行きたい。

「我が名はフリーリッシュ・フォン・ストウール、この国で宰相を務めておる」

……おいおい、ようこそと言ったときながら、次は上から目線で自己紹介かよ。

「そなたらを召喚したのは他でもない、魔王討伐に協力してもらいたいからだ。そのために、我が国の国王であらせられるガーベージ三世陛下の命により、我が国が誇る魔術師どもに召喚させたのである。この世界は長らく魔王の脅威に晒されており、民は疲弊し、勇者の力も及ばぬ状況が続いておる。そこで、異世界より新たな力、すなわち『スキル』を持つ者を召喚し、この窮状を打破する一助とすることになったのだ。スキルとは、そなたら異世界人が持つ特有の能力……我らの世界の魔法や常識とは一線を画す、強力なものがそなたらには発現するとされておる」

召喚とか言っちゃってるよ、こいつ。

それに、魔王だの勇者だの、いきなり物騒な話が出てきたな。

スキルってのは、まあ、ゲームとかでよく聞くアレか。

隣のお姉さんを見ると、青ざめた顔で小さく震えている。無理もない。

「陛下がそなたらにもつたいなくも直接お声をかけてくださる！ このようなことは平民であれば未代までの栄誉である」

……おいおい、なんかこいつら、急に片膝をついて頭を伏せたぞ。

頭を下げた相手ってのは……あの壇上にふんぞり返っているおっさんか。

少し離れた場所に、五十代ぐらいの偉そうにしているおっさんと、感じの悪そうな三十代ぐらいの女がいる。

国王とか呼ばれちゃっている奴とその后か。

「余がインダルチャンス王国の国王である。後のことはこの者たちから聞くがよい」
なんやあのおっさん、喋り終わったと思ったら隣の女にヘラヘラして。

信用ならない国王だな。

近くにいる若い男が頷いているけれど、あれは息子か？

中学生か高校生ぐらいだな。

あ、一人、二十代後半ぐらいのものすごい美女がいる。

もの悲しそうな表情をしている。

他の奴とは対照的な感じだ。むしろ好感が持てるぞ。

「それでは、これよりスキル担当大臣のライヤーより説明がある。そなたらも今の状況が知りたいであろう。ライヤー大臣、後は任す」

宰相を名乗る男がまた変なことを言ったぞ。スキル担当大臣って、なんだそりゃ。

「はっ！ 宰相閣下、お任せください」

……ところで、どうでもいいけれど、俺たちずっとこのままなのか。

せめて椅子とかに座らせてくれないのか。

石の床は冷たくて硬くて嫌なんだけど。

それにいい加減トイレにも行きたいし。あー、このトイレに洗浄機能はあるのか。

今は小だからいいが、大をしたくなって洗浄機能がなかったらどうすんだよ！

外国にはないところがまだまだあるって言うし。

まさかトイレットペーパーすらないとかわわないよな。

「では、よろしいかな。私は召喚された皆さんが元の世界に戻るまで世話をするライヤーという者だ。ああ、心配ない、今回の召喚は本当は一人だけが目的で、他の者は巻き込まただけだ。……ああ、静かにしてくれないかな。そう、それでよい。その者さえ確保できれば、他の者は無事に元の世界に戻すと約束しよう」

戻れるんか。

めっちゃ怪しいぞ。

あ、スーツを着ている奴らが騒いでるな。

「おい、本当に戻れるんだろうな」

「会社に遅れるじゃないか。どうしてくれるんだ！」

「大事な会議があるんだぞ！」

あ、高校生もなんか言ってるな。

「遅刻しちゃったら内申に響くんだけど、どうしてくれるの。推薦狙いだから内申大事なんだけど」

「急に場所が変わったからスマホ落っことして画面割れちゃった。修理代払ってくれる？」

うーん、みんな自分勝手なことばかり言ってるなー。

つーかまずは本当に無事に帰れるのかどうか、安全かどうか見極めないとだろう。

こういうときは目立たないようにするのが一番さ。

「お姉さん、この国の奴ら怪しいから、目立たないようにしといた方がいいよ」

俺が小声で言うとお姉さんはびくりと肩を震わせたが、すぐに俺の意図を察したのか、神妙な顔で頷いた。

「は、はい。分かりました。そういえばあなたのこと、なんとお呼びすればいいのでしょうか」
「おっさんは白河小次郎って言うんだ。とりあえずは白河さんとかでいいよ。お姉さんはどう呼べばいいかな」

「は、はい、杉浦香苗と言います」

「香苗ちゃんだね」

俺がにこやかに言うと、香苗ちゃんは少しだけ表情を和らげたように見えた。
意識して気さくに話しかけてみたのだが、少しは警戒心を解いてくれたのだろうか。

とまあ、そんな風にコソコソと話をしつつ、お姉さんこと杉浦香苗ちゃんの名前をゲットしたのだった。

「皆の言いたいことは分かるが、安心してほしい！こちらでどれだけ時間が経っても、向こうに戻るのには召喚された直後となる。話を進めるが、先ほども言ったように今回の我らの目的は一人だな、それはこの腕輪で見つけ出せるのだ」

そう言ってライヤーが取り出したのは、精巧な意匠がこらされた腕輪だった。

「これを手首に装着してもらって我が呪文を唱えれば、そなたらが目的の人物かどうか分かる。この魔道具にそなたらの情報が伝わるのだ。その際、少しばかり体が怠くなるようなのだが、一時的なものなので心配はいらない」

このおっさん、最初は私って言ってなかったか。今、我って言ったぞ。
それに怠くなるって本当に大丈夫なのか。

「ただ、この腕輪は大変貴重な品で一つしかない。そのため、調べるのに時間がかかってしまうが、そのあたりは許してほしい」

あかん、そろそろ限界や、トイレ行かせてほしい。
目立ちたくはないが、正直に言うか……。

そう思っていると、ポケットに入れているスマホが振動し始めた。

あ、目覚ましでもかけていたかな。

どれどれ、スーッとな。

うん？何か画面に見慣れない表示が出ているな。

なんだこれは。

誤って変な操作でもしてしまっていたか。

画面にさっきの腕輪みたいな絵が出ているな。

そしてその下には、その絵の説明文みたいな文章が書いてある。

〈名称：強奪の腕輪〉

〈効果：対象の人物に装着し、呪文を唱えれば対象のスキルを強奪できる。〉

この間、対象の身体能力は著しく低下する〉

〈種類：魔道具〉

〈素材：不明〉

〈作製者：不明〉

あ？ 何これ。

え？ え？ どういうことだ。

ここに書いてあることが本当なら、やばいやつやん、あの腕輪。

もうスーツ組が何人が装着してしまっているぞ。

装着した奴ら、なんかすげーふらついているやん。

そのままどっかに連れていかれたし。

やばいやばいやばいやばい！ 考える考える考えろ！

お！ またスマホが鳴ったぞ。確認するか。

えっと、どれどれ…これ香苗ちゃんか？ 香苗ちゃんの情報が表示されているようだ。

〈名前：杉浦香苗・すぎうらかなえ〉

〈種族：人間〉

〈年齢：25〉

〈性別：女性〉

〈職業：労働者〉

〈力：弱い〉

〈体力：貧弱〉

〈知力：高い〉

〈精神力：低い〉

〈俊敏：普通〉

〈魅力：高い〉

〈運：普通〉

〈保有スキル：調理・裁縫・調合・清掃・運転・社交・言語〉

〈称号・賞罰：ミス中部市〉

なんだこれ。

どこから突っ込めばいいか分からん。
つーかなんでスマホにこんなの表示してんの。

しかもこんな情報が見られるの、いろんな意味でやばくないか。

……年齢二十五歳。

いや、この状況でそこまでハッキリ表示されると、逆になんかこう、身も蓋ふたもないという
か……って、そんなこと考えてる場合じゃないわ！

ここは考えないといけない。

あの腕輪から逃れるためにどうしたらいいか。

考えるための時間を少しでも稼かせがなくては。

よし、決めた。トイレに行こう！

この行動が、今の絶望的な状況を打開する一手になるかは分からない。

だが、何もしなければ、あのスーツの連中と同じようにスキルを奪われて終わりだ。

それだけは、絶対に避けなければならない。

向こうも現時点でこちらに疑いを持たれたくないだろうから、トイレに行かせないということは
ないだろう。

その間に打開策を考えるんだ。

それに、少しでも状況を動かして様子を見たい。

まあ実際、尿意によういを我慢できないというのもあるけど……。

「トイレに行きたいから案内してくれないか」

スキル大臣に向かって、俺はそう言ってしまった。

さて、どうなるか。

「む、トイレか。我慢できないか」

「ムリムリ。ここに来た時点でしたかったんだ。さっさと済ませるから連れてってくれ」

「分かった。誰か手が空いてる者はいないか」

「わたくしが案内いたしますよ」

そこで名乗り出たのは、先ほどの悲しそうな表情をしていた美女。

「ふん、何もできぬ無能の王女が出しゃばりおって」

「何かおっしゃいましたか、スキル大臣」

「いえいえ、何も。国王陛下がなんとおっしゃることやら」

「国王陛下、わたくしが案内するのに、何か不都合でもありますか」

「うーむ、どう思う、アラガントウ」

美女の問いかけを受けて、国王は隣の下に目を向ける。

「まさにトイレがお似合いな女だこと。早うせい」
うっわ、性格きつそうというか、悪そうな奴だな。あんな后嫌だな。
美人ではあるのだが……。

「メーネアよ、アラガントウもこう申しておる、案内してやるがよい」

「はい、ありがとうございます」

あの美人さんはメーネアというんか。

「それでは、先ほどの方、わたくしが案内しますので、こちらへお越しく下さい」

すごい美女にトイレに案内してもらってなんかドキドキ……いや、今はそんな場合じゃないな。

「じゃあ、早速案内よろしくお願ひします」

一応、丁寧と言つとかないとな。

「あ、あの私も行っていいですか？」

香苗ちゃんが、少し不安そうに、しかし何かを決意したような目でこちらを見ながら言った。

「お、香苗ちゃんも行くのか」

「できればそうしたいのですが」

「えっと、メーネアさんだっけ、この人も一緒に大丈夫かな」

「もちろんですわ。他に行かれる方はいませんか。……いないようですね、ではついてきてくださいませ」

そう言つて前を歩いていく美女、メーネアちゃん。後ろ姿が美しい。

すらりとしていてスタイルがいい。

背が高そうに見えたが、近くで見ると意外とそうでもないな。

お、足首が細い！ しかも脚が長い！

世の中にはこんな恵まれたスタイルの人もいるんだなあ。

（ちなみにこのメーネア女史、おっさん好みのスレンダーな美人だ。大事なことから特別に括弧書き）

「あ、あの、わたくしに何か変わったところでもありましたか？」

俺がじつと見つめていたことに気付いたのか、メーネアちゃんが振り向いて聞いてきた。

「いえいえ、今まで王女様みたいな身分の方と接したことがないので、思わず見惚れてしまったんですよ」

「そうでしたか。わたくし、もっと民と接してみたいのですが、なかなか父である国王陛下がお許しにならないのです」

「身分があつても大変ですわねえ」

軽い雑談をしているうちにトイレに到着する一行であった。

中に入ると、目の前に黒光りする例の奴——Gがいて、こっちを見ていやがった。

うわ、でけえな。

俺は虫は平気な方だけど、こいつはちよつと引くサイズだ。

思わず「うわっ」と声を上げそうになったが、隣のメーネアちゃんと香苗ちゃんの手前、平静を装う。

メーネアちゃんは顔色一つ変えない。流石王女様。

香苗ちゃんは、うん、固まってるな。

可哀想に。

とっさに「あっち行け！」と小声で言ってみると、Gがピクリと反応し、向きを変えようとした。

え、マジか。

こんな世界に来たせいか、ふと、テイマースキルってやつではなかるうかと思ってしまった。

まさかとは思うが……。

そのGの反応を固唾を呑んで見つめていたメーネアちゃんが、やがて震える声でこう言ってきた。

「申し訳ありませんが、シラカワ様。その虫に、そこで止まるようにと命令していただけませんか？」

え、命令？ 本気で言ってるのか、この王女様は。

だが、さっきのGの反応は確かに奇妙だった。

まさかと思っただ、もしかしたら……。

メーネアちゃんの真剣な眼差しに、試してみる価値はあるのかもしれない、そう思った。

「……止まって」

半信半疑で、今度ははっきりとした声でGに命じてみた。

すると、Gはその言葉の通りに、ぴたりと動きを止めたではないか。

「……こっちに来て」

さらに命じると、Gはおずおずとこちらへ近付いてくる。

マジかよ……本当に言うことを聞きやがった。

やつぱり、これってテイマースキルってやつなのか！

メーネアちゃんも息を呑んでいるのが分かる。

よし、こうなったら……。

俺は生き残る道を探るため、手を打っておくことにした。

心の中でGに集中し、呼びかける。

（おい、その黒いの。聞こえるか？ ちよつと頼みがあるんだが、協力してくれないか？ 後で

美味いもんやるからさ)

すると、次の瞬間、脳内に直接声が響いてきた。

『任せてほしいっすダンナ！』

って、おいおい、マジかよ！ こいつら、知性あんのか。

しかも妙に威勢のいい口調だ。

(お、おう。じゃあ、後でな。ちよつと隠れててくれ)

『了解っす！』

Gはすると壁の隅へと消えていった。

本当にスキルってやつなのか、これ。

ふうう、生き返る。

この解放感、分かるよね。

俺は無事トイレで用を足すことができていた。

しかし、異国のトイレって感じだな。

昔どっかの自動車博物館に、世界各国のトイレが集められていると話題になっていたっけ。

男性も女性用のトイレをお試しあれっつてもんで、ドキドキしながら入ったのを覚えている。

女性用トイレに入るってそうそうないしな。

……って、話がそれた。

うーん、現状どうなんこれ。

ちよつと落ち着いたから冷静に考えてみると、かなりやばいよな。

何かスマホにヒントが……って、今度はメーネアちゃんが表示されてるぞ。
どれどれ。

〈名前…メーネア・シンセリテイ〉

〈種族…人間〉

〈年齢…28〉

〈性別…女性〉

〈職業…姫〉

〈力…弱い〉

〈体力…そこそこ〉

〈知力…高い〉

〈精神力…高い〉

〈俊敏…遅い〉

〈魅力…恐ろしく高い〉

〈運…あまりない〉

〈保有スキル…社交・魔術・話術・魅了・教育・識別^{しきべつ}〉

〈称号・賞罰…王女〉

おーなんかすごいな。

姫って職業なん？

称号は王女になってるし。

で、二十八歳、と。

うーん、この表示、さつきも思ったけど年齢をぼかすとかないのかね。

異世界のトイレの構造なんかについても言いたいことはあるが、おっさんがトイレしてるところを想像させちゃいそうだからやめよう。さあ出よう。

出口ではメーネアちゃんが一人で待っていた。

香苗ちゃんはまだのようだ。

「メーネアさん、お待たせ」

「あ、あのー！」

「はい」

「父の行ったことに巻き込んでしまって、本当に申し訳ありません。謝って済む問題ではないのですが」

うーん、やっぱり表情暗いよな。

ろくなことにならなそうだ。

「やっぱり元の世界には帰れないのだろうか」

「ごめんなさい」

「俺たち、これからどうなるの」

「それは……」

「あのスキル大臣だっけ。あいつが持ってた腕輪、あれってスキルを奪うやつだよな」

「!! どうしてそれを……」

メーネアちゃんが驚いた表情を浮かべた。

「なんかスマホに出たんだよね。強奪の腕輪って」

「すまほ、ですか」

「これだよ」

「これは……もしかしてですが、あなた様は『鑑定』のスキルの所有者なのですか」
『鑑定』、とは」

「はい。調べたいものや人物の情報が分かるのです」

「うーん、確かにじっと見たものや人の情報が出たね。ちなみに、自分の情報ってどうやって調べ
るんだ？」

「えっと、わたくしは『鑑定』のスキルを所有しておりませんので分かりかねますが、そのすま
ほで自分の情報は出せませんか？ 先ほどの虫とのこともございませし、ひよつとすると『テイ
マー』のスキルなどお持ちなのでは？」

さっきのGのことか。メーネアちゃんにはGの声は聞こえてないはずだけど、やっぱり俺がGを
操っているように見えたのかもしれないな。

「うーん、どうなん……お、出てきた」

自分の情報を見られないかと考えながらスマホを触ると、表示が切り替わる。

〈名前：白河小次郎・しらかわこじろう〉

〈種族：人間〉

〈年齢：45〉

〈性別：男性〉

〈職業：労働者〉

〈力：強め〉

〈体力：普通〉

〈知力：普通〉

〈精神力：まあまあ高い〉

〈俊敏：速い〉

〈魅力：地味に高い〉

〈運：高い〉

〈保有スキル：鍛冶・鑑定・いんたーねつど？・異世界売買・話術・魔術（土限定）・

社交・気配遮断・情報操作・農作業・建築・言語・テイマー・

転移（限定）

〈称号・賞罰：おっさん〉

やっぱり『テイマー』のスキル、あるじゃねえか！

さっきのGとのやり取りはこれのおかげだったのか。

よく分からんがたぐさんあるな。なんだこりゃ。

『いんたーねっと?』とか『異世界売買』ってなんだ。何か買えるのか。

それとずっと謎だったんだけど、言葉が通じるのは『言語』ってスキルのおかげなのか?

『鑑定』やら『アイマー』やらいろいろいるのがある」

「やはりそうですか! 説明している時間はないのですが、わたくしを信用してもらえませんか。助けられる方だけでも助けたいのです」

「……なんで王国側のメーネアちゃんがそんなことを?」

「詳しくは後ほど話します。急がねば。先に腕輪を装着した人たちはおそらくもう……」

うわ、本当にやばいな。

このメーネアちゃん、信用しろって言われてもいきなりすぎて困るけど、美人だしなあ。

うーん、信用かあ。

信用といえば、高校生の頃に何かの講演で、引退したばかりの元国会議員の人に言われたことがある。

『三十秒で敵か味方か判断しなくてはいけない』って。

政治家をしていると、いろんな人がたぐさん近付いてくるからって。

よし、やってみるか。俺はメーネアちゃんの肩を掴み、じっと顔を見つめる。

彼女の目を見て、本当のことを言っているかどうか判断するのだ。

「あ、あの、そんなに見つめられると困りますわ。それとも何かわたくしの顔、変でしょうか」

「むむむむ」

「きゃっ、肩が痛いですわ。そんなに力を込めなくても」

「おおお! おおおお! はっ! ごめんごめん」

手を離すのと同時にスマホが振動したから見てみれば、大いに信用できる、と表示されていた。

これもしや『鑑定』のスキルの力か。

「メーネアさん、俺、あんたを信用するよ。どうしたらいい」

「え、あ、はい、ありがとうございます。決断が早いので驚いています。では、まず――」

この間、二分ほど。

そして、戻ってきた香苗ちゃんと簡単に作戦の流れを打ち合わせたのであった。

それは先ほど俺がGに指示したことにメーネアちゃんの案を加えたもの。

香苗ちゃんはGを使った作戦内容を聞いて、心底嫌そうな顔をしたが、俺とメーネアちゃんの真剣な様子に、生き残るためには仕方がないと観念したようだった。

彼女の顔は恐怖の色が濃かったが、それでも俺から目を逸らさず、必死に頷いていた。

さてと、ちよっと時間がないけど、他にできることがないか少し試してみるか。

トイレから戻るのが遅いと警戒されるので、戻りながらスキルを試してみることに。あれこれスマホを触ってみたが、普通の機能は一部使えなくなっており、日本とは繋がらなくなっているようだ。

新しく追加された項目である『異世界売買』を見てみる。

お、出た出た！ 画面にページが表示された。

なになに……まるで有名な通販サイトみたいだな。

ちよっと試しに水を買ってみようか。

そう思って水の項目を探してタッチしてみると、残高が足りないようだった。

どうやってチャージしたらいいんだろう。

試しに財布の中の小銭を探し、奮発して五百円玉をスマホにかざしてみると……。

お、吸収された。

どーなってんのこれ。

〈異世界の硬貨。品質最上級。金貨一枚で買い取りできません。買い取りますか？〉

うん。この世界の貨幣の価値が分からないけど、金貨一枚って何げにすごそう。

じゃあ、買い取りっと。

お、金貨一枚がチャージされたぞ。

じゃあ、改めて買おうかな。

水は、銀貨一枚、か。

じゃあぼちっと。

残高銀貨九枚ってか。

ふーん、金貨一枚は銀貨十枚ってことか。

おっとっと、カバンが重くなった、よくな。

どれどれ。

俺のカバンの中を見ると、有名なミネラルウォーターが入っていた。

すげー、本当に買ったー！ これが『異世界売買』の力なのか。

ああ、ゆっくりしている時間はないな。何か役に立ちそうなものとかないかいな。

だけど、手持ちの金はそれほどないから、あっても買えるかどうか。

「なあ、メーネアちゃん、手放してもいい宝石とか装飾品とかないか。スキルでいろいろなものを買えそうんだけど、そんなにお金持ってなくなっさ」

「え？ えーと、それはどういう……」

「なんかね、おっさんがいた国のものをスキルで頼んだら、このカバンに入るっぽいんだよ。で、お金は何か買い取ってもらえば手に入るんじゃないかって気がしてるんだ。それで、試しにメーネアちゃんの持っているもので何か使っているものないかなあ、と。あいにく、おっさんはそんな価値のあるもの持ち合わせがなくなってるね」

「そういうことでしたら、このネックレスを」

メーネアちゃんが首から外して渡してきたのは、かなり高そうなネックレス。

流石は王女様だな。

「いいのかな。高価なものに見えるけど」

「時間がありませんので、構いません」

「じゃあ、早速……」

〈サファイアのはめ込まれたネックレス。高品質。金貨五十枚で買い取りできます。買い取りますか？〉

おーすげー。じゃあ折角せつかくなので、と。

俺はネックレスをスキルで換金したのだった。

そうこうしているうちに、俺たちはさっきの場所に戻ってきていた。

うわ、日本人もう三人しか残ってないやん。

「ヨクダ・タイブンゼ・ルキスノ・タンア」

スキル大臣が専門学校生っぽい奴に呪文を唱えたな。

ふむふむ、腕輪は簡単に取り外しできそうだな。

「お疲れさまでした。残念ながら私共の探していた人物ではなかったようです。しばらくすれば元の体調に戻るのだから、あちらの部屋でしばし休んだのち、元の世界へ戻っていただきます」

「やっと帰れるのか。しかし、怠いな」

「おい、肩を貸してやれ」

「はっ！ ではそこの方、こちらへ」

「あ、分かったよ。あの部屋に行けば帰れるんだな」

「もちろんです」

あー、連れていかれたよ。

おっさん、みんな助けたいけど、力不足だ。

自力でなんとかしてくれな。

こちとら自分一人と、もう一人が限界。

羽音を立てながら、大臣や兵士たちの顔めがけて突っ込んでいく。

カサカサカカ カサカサカカ カサカサカサカサ
カサカサカカ カサカサカカ カサカサカサカサ
カサカサカカ カサカサカカ カサカサカサカサ

視界を黒い影に覆われた兵士たちは、「ぎゃあああ」と悲鳴を上げて、その場でめちゃくちゃに暴れ始めた。

完璧な混乱状態だ。

今だ！ よっと。

俺はその隙を逃さず、ライヤー大臣が恐怖のあまり落とした腕輪を拾い上げ、大臣に装着。

「な、何をする！」

「ヨクダ・タイブンゼ・ルキスノ・タンア」

「な、貴様！ なぜそれを！ や、やめろー」

「おたく、あほか。目の前で何度も唱えてたたる」

「待て！ う、力が入らん」

ドサッ。

「もう遅い！ あ、この腕輪もらってこね。そのよく分からんごっついプレートももらってこよ！」

Gの上に倒れるとか一生もののトラウマだな。

「よし、Gたちよ！ 偉そうにしてる奴らへ向かって飛んでくれ！」

カサカサカサカサ カサカサカサカサ カサカサカサカサ
カサカサカサカサ カサカサカサカサ カサカサカサカサ
カサカサカサカサ カサカサカサカサ カサカサカサカサ
カサカサカサカサ カサカサカサカサ カサカサカサカサ
カサカサカサカサ カサカサカサカサ カサカサカサカサ
カサカサカサカサ カサカサカサカサ カサカサカサカサ

Gたちは最後の仕上げとばかりに、壇上でふんぞり返っていた国王たちに向かって飛んでいく。

よし、あとはこのままずらかるのみ。

「香苗ちゃん、行くよ」

香苗ちゃんは顔面蒼白で「死にたい」と呟いていたが、俺が手を引くと、ふらつきながらも従ってくれた。



その小さな手を握ると、震えているのが伝わってくる。

「ご、ごめんよ。怖い思いをさせて……」

「さあ、こちらです。今のうちです」

「分かったよ、メーネアちゃん」

お、偉そうにしてた国王夫妻が叫んでるが、Gを前になすすべもなからう！

Gに感謝する日が来るとは思わなかったな。

うわ、Gをものともせず追いかけてくる奴らもいるな。

……よし、やるか。

えっと、油油……何かあるかな。

お、サラダ油をと。

俺は『異世界売買』でサラダ油を二本購入する。

「香苗ちゃん、これ床に撒きながら走るよ。頼むわ」

「は、はい」

香苗ちゃんは、まだ恐怖で顔を引きつらせながらも健けなげ気に頷き、油のボトルを受け取って俺と一緒に床に撒き始めた。

その必死な姿に、俺もなんとかこの子を守り抜かなければという思いを強くする。

おー、流石は石の床。
みんなコケるコケる。
立ち上がれないだろう！

移動すること十分近く、各所を守る衛兵は王女のメーネアちゃんの姿を見ると何を言うでもなく道を開け、思いのほか簡単に城の外に出ることができた。

城の外の路地裏までたどり着き、俺たちはようやく一息ついたのだった。

脱出してすぐ、俺は例のスキル『異世界売買』で、Gたちが喜びそうな甘い菓子折りをいくつか購入した。

タイミングよく、さっきのとは別のGが一匹、近くの物陰からこちらを窺っていた。

「よう、さっきは助かったぜ。これ、お礼の餌だ。仲間と分けてくれ」

菓子折りを差し出すと、Gは驚いたように触角を震わせた。

『こ、こんなすげーのいただいていいんすか、ダンナ』

「ああ、これぐらいしかできなくてな。あんたらの仲間の何匹かは犠牲になっちまったかもしれない。悪いことをした」

『いいんすよ、ダンナ！ あいつらも本望だったと思いやす！ おっと、そろそろ仲間はこの吉報

を伝えにいかないと。ダンナ、またなんかあったらすぐに駆けつけますんで！ ではまたってこと
でいいすかね!』

Gは敬礼するように脚を上げると、仲間のもとへ去っていった。

ふう、変なところで義理堅い奴らだ。

香苗ちゃんは、俺とGが普通に会話している（ように見えたのだろう）様子を、口を半開きにして見ていた。

だが、やがて俺に向き直ると、震えながらもどこかホツとしたような、そして少しだけ尊敬するような眼差しを向けてきた。

このおっさん、一体何者なんだろう、そんな心の声が聞こえてきそうだ。

しかし、簡単に城から抜け出せたことを考えると、今回のことは末端の兵士には知らせてなかったんだらうか。

あと、普通王女ってこんな少人数で外に出られるものかな。

思い返すと、大臣やら后やらがメーネアちゃんにひどい態度をとっていたから、その影響か。ともあれ、無事脱出できてよかった。

幕間　　メーネア・シンセリテイ

メーネア・シンセリテイ、それがわたくしの名前。

インダルチャンス王国の第一王女。

我が父は、インダルチャンス王国の現国王ガーページ三世。

そしてわたくしが心から敬愛する母は、アリーチェ。

今ももう、優しい面影と温かい教えを胸に抱きしめることしか叶いません。

そう。あの忌まわしいアラガントゥとかいう女は、決して、わたくしの母などではないのです。

すべての悲劇は、わたくしがまだ幼かった十五年前にその幕を開けました。

当時、父の数いる側室の一人に過ぎなかったアラガントゥが、男児——すなわちわたくしの異母弟となるストユーピッドを出産したのです。

父は元来、あの妖艶な女に心を奪われておりましたが、待望の男児を得たことでその寵愛は揺るぎないものとなり、国政の隅々にまであの女の影響が色濃く滲み出るようになりました。

ああ、あのとき、父の愚行を諫め、国の行く末を正すことができる忠臣が一人でもいたならば、わたくしの母アリーチェは、アラガントゥからの執拗な嫌がらせに遭いました。

さらに、日に日に心を失い変貌していく父、何よりも愛するこの国の未来を深く案じるあまり、母は心労から床に臥してしまいました。

そして、わたくしがまだ母の温もりを求めていた齡のうちに、静かにこの世を去ってしまわれたのです。

最後にわたくしの小さな手を弱々しく握り、途切れ途切れにおっしゃった母の姿が、今も胸に焼き付いております。

「メーネア、あなたは賢く、そして優しい子。どのような苦難が訪れようと、その清らかな心の輝きだけは、決して失ってはなりませんよ。それこそが、シンセリテイ家の娘としての、何よりの誇りなのですから」

そのときの母の優しい微笑みと言葉が、絶望の淵に沈むわたくしを今もなお支えてくれているのです。

わたくしが十三歳のとき、追い打ちをかけるように、あまりにも無慈悲な運命が訪れました。

アラガントゥは、自らの息子ストユーピッドを次期国王の座に据えるという野望のため、その最

大の障害となる我が同腹の兄、リアム・シンセリティを排除せんと画策したので。

彼女は父を巧みに焚きつけ、国力も顧みず、無謀にも隣国との戦端を開かせました。

当時十七歳であった兄様は、王太子としての責任感は一倍お強かったものの、まだご自身のスキルも完全に発現しておられませんでした。

それにもかかわらず、アラガントウの差し金により、実戦経験の乏しい若い兵士ばかりの部隊をあてがわれて最も危険な前線へと送られました。

そして、二度と王城の土を踏むことは叶わなかったのです。

出陣の前夜、兄様はわたくしの部屋を訪れ、おっしゃいました。

「メーネア、お前は聡明で、民を思う心も深い。いつか、この国を内から賢明に支える力となっておくれ。私は、この身をもって国を守ることしかできぬ、武骨な剣士だからな」

そうしていつものように力強く、けれどどこか寂しげな微笑みを浮かべて、わたくしの髪を優しく撫でてくださいました。

その大きく、節くれだった手の温もりが、今でも忘れられません。

アラガントウの卑劣な策略によって、あの頼もしく優しくかった兄様が、もはやこの世におられないという事実。

それは、わたくしの心を長年にわたり苛みました。

兄様は、どれほど無念であったことでしょう。

国に行く末を誰よりも憂えて、わたくしたち家族や民の幸せを心から願っておられた、あの優しい兄様。

あの戦争は、アラガントウが己の野望のために兄を死地に追いやった、許されざる暴虐に他なりません。

この怒り、この無念、いつか必ず晴らさねばと、わたくしは幼いながらに固く心に誓ったのでした。

我が国が隣国との無益な戦いを終結させたのは、今から七年前のこと。

その間、わたくしはアラガントウの巧妙な監視と妨害により、他国へ嫁ぐことも、国内で婿を迎えることも許されませんでした。

このインダルチャンス王国では、十五歳で成人を迎え、王族や貴族の女性であれば二十歳を迎えるまでには結婚し、家と家との結びつきを強めるのが習わしです。

この国では、未婚の女性が二十五歳を超えると結婚適齢期を大きく過ぎていると見なされます。

そのため、わたくしのようにその年齢を過ぎて独り身の者は、周囲から特別な目で見られることも少なくありませんでした。

その上わたくしは、ただひたすらに異母弟であるストューピッドの養育と教育の補佐を強いられるという、屈辱に満ちた日々を送らねばならなかったのです。

彼が成長するにつれ、その父王譲りの浅慮とアラガントウ譲りの傲慢さが露わになるのを見るのは、わたくしにとって苦痛以外の何ものでもありませんでした。

わたくしの青春は、そして一人の女性としてのささやかな幸福を夢見る権利は、あの忌まわしい母子のために踏みにじられたのです。

父はその後も、アラガントウの言いなりとなり、数々の非道な行いを重ねてまいりました。

その中でもわたくしの心を最も深く傷つけ、そして許しがたいと感じたこと。

それは、異世界からなんの罪もない人々を強制的にこの地に召喚し、彼らが持つ固有のスキルを奪い取り、その用が済めばまるで道具のように命まで奪い去るという残酷な行為でした。

何も知らず、ただ平和に暮らしていただけの人々。

彼らは高確率でなんらかの有用なスキルを所有しており、稀にですが、国家の運命すら左右しかねないほど強力なスキルを持つ者もいるといます。

しかし、その召喚の儀式は国の魔力を著しく消耗させるため、何度も行うことはできないようで、概ね五年に一度が限度とされておりました。

そして今回は、ストューピッドの成人の儀という、国にとって重要な祝祭に合わせて行われることになっていたので。

通常、十五歳で成人の儀を迎えても、すぐにスキルが発現することは稀です。

ですから、その儀式の場で、次期国王たるストューピッドが強力なスキルを披露することができれば、それは国中の民の期待と支持を一身に集める絶好の機会となるはず。

それこそがあの女の深謀遠慮なのでしょう。

わたくしは、その邪悪な企みを阻止するすべも、力も、残念ながら持ち合わせてはおりませんでした。

召喚の日、スキルを奪うため異世界の人々を喚び出すそのまさに前日に、アラガントウは冷酷な笑みを浮かべ、わたくしにこう言い放ったのです。

「ストューピッドも無事成人するし、そなたのような役立たずはもういらぬわ。せいぜい、異世界から来た者たちと共に果てるがよい。そなたのスキルの一つや二つ、ストューピッドがありがたく使つてやるゆえ、安心して逝くがよいわ」と。

愕然としながら父の顔を仰ぎ見れば、驚くべきことに父もまた、あの女の言葉を全面的に受け入れ、「すべては国の安寧のためだ」などと、聞くに堪えない綺麗事を並べ立てる始末でした。

ああ、もうこの国に、いいえ、父の心の中にすら、わたくしの居場所など欠片も残されてはいな